

当財団の「アドミュージアム東京」資料室には、さまざまな企業PR誌が所蔵されています。
その中から優れたものを取り上げ、それがどのような企業個性を表し、時代を捉えているかを探ります。

白木屋呉服店『流行』1908年、1909年

最先端の施設やサービスを訴求

白木屋は寛文2(1662)年8月に江戸の日本橋で開業し、やがて越後屋(後の三越)、大丸屋(後の大丸)と並ぶ江戸三大呉服店の一つに数えられた老舗です。

明治36(1903)年10月1日、日本橋に和洋折衷の3階建ての店舗を新装開店し、店内に飲食店や遊戯室などを設け、日本の百貨店の先駆けともいえる形態を創り出しました(ちなみに三越呉服店が全国の新聞に「デパートメントストア宣言」を掲載したのは明治37[1904]年12月です)。

PR誌『流行』には、白木屋の企業文化が表れています。この欄で紹介する明治41(1908)年8月1日号は、表紙に第五年八月号と記してありますから『流行』が明治37(1904)年に創刊されたものとわかります。

表紙を開くと、まず「御注文のしおり」という案内記事です。

「白木屋呉服店は、寛文二年に御当所へ開店致しましてから連綿と今日まで変わりなく現金正札付きで呉服太物その他の商品を販売しております老舗でございますから、ご来店になりましてお買い上げ遊ばす時も、ご遠方からご書状でご注文になりましても値段に掛け引きはすこしもございませんから、ご安心の上ご用命を願います」と信頼を訴求しています。そして〈店内の構造〉〈新柄物仕入の機関〉〈地方販売の機関と新意匠〉〈共通商品切手〉〈御婚礼用具並びにご進物呉服細工〉〈石持御模様物その他〉という項目で白木屋の業務を簡潔に説明します。

「およそ東京一流の呉服店で洋服店



『流行』明治41年8月1日発行の第5年8月号の表紙

を兼業いたしますのは白木屋呉服店が嚆矢でございます」「お子様方をお連れ遊ばしてご来店になり長時間お買いもの等にてご退屈の場合には遊戯室の設けがございましてあらゆる玩弄物も備え(途中略)お相手になる保母も抱えております」「御休息室に茶菓の備えも致してございます」と品物の先進性と店内の快適さ、行き届いたサービスを訴えます。

「遠い地方からご注文になりましても東京にお住いの御方と同様、居ながらにして新流行品お買い上げの便がございませう」など通信販売の仕組みも細かく説明します。

続いて、15ページにわたり新柄呉服(四十六品目)の写真版が値段入りで紹介されます。ここまでがいわばコマースシャルです。

流行を追究した本文記事

本文記事は流行に関する多彩な内



第5年8月号の「名家の流行観」から

容で構成されています。

巻頭の「流行時言」は、戸川残花の「図案と文芸」と題する博識豊かなエッセーで、衣服の意匠に関して、専門家はもとより素人も文学的な趣味を養うことが必要だと述べています。山の手は西洋式、下町は日本式であり、その関係を研究すべきだという指摘はうなずけます。

「名家の流行観」は、著名人についての話です。

三輪善兵衛の「白粉化粧に於ける生彩」は、持って生まれた地肌の美がそのまま生き生きと表れている化粧が「生彩」であり、そのための化粧法が大事だといっています。

高木男爵夫人の「色の流行と形の流行」は、日本と西洋の流行を比較し、流行に雷同する当時の日本の現状を率直に記しています。

岡野知十の「女流作家が作中の服飾」は、当代人気作家・大塚楠緒子の

おかだ よしろう●1934年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。56年電通入社。コーポレートアイデンティティ室長を経て電通総研常任監査役。98年退職。70年の大阪万博では、「笑いのパビリオン」を企画。80年代は電通のCIビジネスで指導的役割を果たす。著書に『社会と語る企業』（電通）、『観劇のバイブル』（太陽企画出版）、詩集『散歩』（思潮社）、『世界一の映画館と日本一のフランス料理店を山形県酒田につくった男はなぜ忘れ去られたのか』（講談社）など。

『空薫』と岡田八千代の『新緑』を取り上げて、服飾の細かい描写が“女流ならではの及びがたき筆”が表れていると評しています。

「小説」は、大島宝水の『当世浮世風呂』です。「午前の女湯」という題で、女同士の風呂屋の会話で読者を惹きつけます。読んでゆくと、白木屋の立派な休憩所やそこで供されるお菓子や3階の食堂の話になり、反物と夏帯を買ったという話になっていきます。一種の広告小説といえるでしょう。

「雑録」は、法学士・唐沢新助と工学士・水上規矩夫の「牛乳馬嘶義」です。衣服・装飾の選び方についての辛口の評論です。

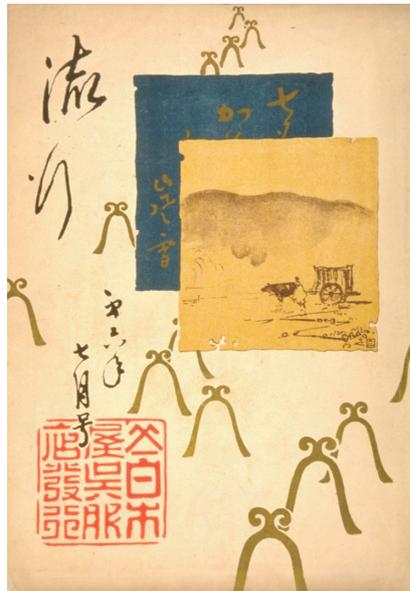
巻末に注文書が一式用意されています。寸法などを書きこむ欄もあり、間違いなくオーダーできるようになっています。

洋服や西洋雑貨までもカバー

明治42（1909）年七月一日発行の第6年7月号を見ると、全体の構成はあまり変わっていませんが、表紙裏に「七月一日より中元大売出し仕り候」と大書して、〈呉服太物〉〈歌舞伎模様応用の浴衣地、帯側、帯揚〉〈仕立洋服〉〈和洋雑貨〉〈商品切手〉を売り出しています。すでに呉服店というよりは百貨店の品揃えを志向しているのがわかります。

「御注文のしおり」は白木屋の特長と業務内容を簡潔に説明します。

その次のページは「白木屋調製の夏洋服を召し給え」という見出しで、白木屋の洋服地が英、米、仏、独の各織元からの直輸入で、熟練の縫製職人により流行の先駆となる服を仕立てることを解説します。そして「最新流行の御婦



明治42年7月1日発行の第6年7月号の表紙

人服と児童服」の写真が読者の目を惹きます。「東京某氏令嬢」は新しい外出着を提示し、「東京某氏令息」は少年のおしゃれを提案します。

この号で目立つのは、洋服をクローズアップしていることです。白木屋ならではのプレゼンテーションといえるでしょう。

「中元御進物用夏服地」という見出しで最新輸入の洋服地を推奨し、続いて23ページにわたり夏物呉服（八十一品目）が写真版で紹介されます。その後、「ドレッシングケース（旅行用化粧具箱）とステッキ」「旅行携帯品数種（旅行用食器、スポンジパックなど）」が3ページを占めます。これらの西洋雑貨はまだ一般の生活になじみのない商品が多かったにせよ、読者に新時代の息吹を感じさせたに違いありません。

本文記事は流行に関する内容です。

岡野知十の「浴衣」は、酒井抱一が浴衣に自家用の図案を染めた話で、浴衣や手拭い一つにも趣向を凝らした粹



第6年7月号の「最新流行の御婦人服と児童服」から

人の心意気を感じられます。

大島宝水氏の「流行ということ」は、みだりに流行を追うのは自己の鑑識がないことを表して最後に残るのは疲労ばかりであり、選択があって初めて流行そのものの価値がわかると述べています。

「重用記事」は、流行記者による「夏の洋服はドンなのがよく似合いませんか」です。夏のフロックコートと夏の背広服それぞれに、上着、チョッキ、ズボン、地質と柄、価格についてその年の流行を詳細に報告します。

巻末には、「代価表」として呉服太物、洋服、雑貨、慶事用衣装の値段が12ページにわたって列記されています。これらの品物にこの時代の都会の人々の生活が浮かび上がり時代の素早い変化を感じ取れます。

白木屋の『流行』は、時代に最も敏感なPR誌であったように思われます。

*引用箇所の表記は新字・現代仮名遣いに変更